

岡本韋庵『支那遊記』翻刻・訳註（その二）

有馬卓也
真銅正宏

（本稿は徳島大学国語国文学9号の続きである）

【訳註】
十一月二〇日

二十日。寒に堪えず。鶏鳴に先んじて起つ。李葆和を促して驢子を發せんとするも、皆曰く「此の際は路極めて険し。天の明くるに非ずんば不可なり」と。余、独り月明に乗じて郭家を發し、少林寺の東の一村を經。二三人の馬に跨りて来る者あり。又た高阜の上に立ちて西に向ひて人を呼ぶ者あり。大いに寂寥を破る。太室山・達磨洞を睥睨するに、大いに寂寥を破る。以為らく、余、一夕の心に安んじて、九年面壁の跡を探らんと欲す。達磨以て如何と為す。感慨に堪へず。更に行くこと七八町。道傍の皂角樹、一團半なるべし。枝葉扶疏として、方十手の間を隱蔽す。高さ二丈に過ぎず。下に小祠あり。此の間、諸山に一樹も見えず。間ま異常なる大木を見る。嵩山の土性を檢するに、松柏に非ずんば生ずべからず。只だ之れを斬伐して長養せざるのみ。此より路益ます悪し。往々にして潦水あり。左に乾谷を望む。右して山に傍ひ

て行く。輾轅嶺に抵る。漸く天明を報ず。回顧するに嵩山の天際、赤色にして大火の空を烘らすが如し。徐々として行き、三家店に達す。余意ふに馬夫は郭家に宿す。余の為に行くを督すが故に昨日既に此に來りて馬に秣ふ。因て李の來るを待つ。九時に至り、漸く三家店を發し府店鎮に到る。左路を取りて西北す馳すこと三里許。二村を過ぎ溝司に達す。千八百家許あり。四周土壁あり。前村より此に至るまで、路旁壁立す。高さ二丈に及ぶものあり。石礫多し。北は洛水に属す。漸く低し。南望するに、蓮花山脈、東西に横たはり亘る。頗る高峻たり。更に西北す。三里許。二村を過ぐ。地勢平坦たり。五差口に達す。百余家あり。其の西土壁を四周す。中に千余家あり。是れ廂閣鎮たり。更に右折す。洛水に出づ。午後三時、洛水を渡る。広さ十五六手。人渡るを争ふ。馬夫怒りて、余以て宜しく先に渡すべしと告ぐ。船人、舟に棹す。衆、車を推して直ちに入る。余の車載るを得れども一馬は終に乗るを得ず。駆けて河に入れ引きて進む。其の深さ一身を過ぐ。其の余も亦た二尺なるべし。既に渡る。舟人、馬夫に向

ひて錢を要む。因りて二三十文を与ふれば、則ち更に要めて止まず。李をして少し許与へしむ。乃ち喜謝して去る。河を渡り磧上より北行す。二三丁。一小堤あり。東西に綿亘す。即ち洛水の漲溢するを防ぐなり。堤を踰え稍や行きて左折す。二三町。田苗村に抵る。百余家あり。更に西に四五丁。左に土壁を周す。又た行くこと十余丁。一山あり。東西に連なりて、二三里外にあり。東西浩浩として一山も見ず。唯だ烟氣の黒起するを望むのみ。之を北京と比ぶれば、甚だ雅致あり。此の夜、鎮塞に宿す。三家店より距つること七十里と称す。

(1) 底本は「北」の上に「直」字が消し忘れて残っている。消去した。

(2) この「十」字は墨筆で行間に記されたものである。(斎藤)
十一月二日

二十一日。早くに行きて北望するに、地勢広坦なり。村落の樹木、各処に粧点す。一堆土の壇の如きものあり。洛陽の故城趾と云ふ。田土の肥沃なること鄭州に過ぎ、山東の諸処の及ぶ所に非ず。麦苗青々たり。西のかた行くこと十町許。百余家あり。寧莊たり。又た十四五丁。千余家あり。田村たり。又た里許。瀨洛に雁の回翔飛鳴するもの多し。其の声、遠く聞え、大いに逸興を添ふ。自ら王城の氣象あり。蓋し洛水の傍に飲啄するもの有るならん。爰に千余家あり。相公莊寨たり。更に行くこと七八丁。一村を過ぐ。其の西に百家許あり。前村と同じ。名は黃氏寨たり。又た三十町許。左に二村あり。其の名を知らず。往々にして大墳

墓を見る。又た二十丁許。一小村あり。潘寨たり。其の右に一村の土壁に囲まるるあり。又た七八丁。百余家あり。太平莊たり。又た十四五丁。百余家あり。李家樓たり。此を過ぎて直ちに洛水の傍に出づ。水の広さ一丁余。東北に流る。甚だしくは深からず。蓋し洛水の支流ならん。木柱を水中に建て、上に高粮の幹を敷き、覆ふに土の厚さ尺余を以てす。広さ七八尺。以て車馬人徒を渡す。又た西南のかた二十五六丁。河南に達す。河南府は周圍二十余里と称す。人家三四千あり。鎮塞より距つること四十里と称す。河南の地は、洛水の北に在り。水は西南より來りて東北に流る。西北には平山を負ひ、東北には小山、連なり亘る。東南より西南に至りては、大山蟠踞す。黄河より距つること五六里南なり。風景、凡ならず。午後、知府某と畧令路環とを訪ぬ。故蹟を問ふ。答へて曰く「一も存するものなし」と。信を尽す書も書なきにしかず。蓋し知らざるが故に遁辭するのみならん。暮るるに及び、知県、

人をして飲食を贈り來らしむ。四十あり。曰く「糖花生・荷頭実・葡萄・糖杏実」と。四禿あり。曰く「去皮李・糖山查・去皮菓の葡と桃」と。六大碗あり。曰く「蝦■白菜・清湯鴨・海带白菜・海參・紅肉・鶏」と。二大件あり。曰く「魚翅・鴨肉」と。六中碗あり。曰く「炒鶏片・醬鶏・紅燒魚・鶏肝・白菜・田筋」と。二道点心あり。曰く「蒸餅水晶・包炒麵花」と。八冷葷あり。曰く「醬肉・変鶏子・醬鶏・醬魚・紅燒魚・鶏肝・白菜・面筋」と。蓋し上客を待するの礼を以てするならん。前日、泰安に宿せし時、知県の贈りし所、大略此に類す。此の日、知府に見えんと欲し、其の時を移すを恐れて、本邦の粧、清袍を蓋ひ其の帽を

戴く。人の焉こゝを怪しむ者あり。知府の延見レするに及び、忽ち袍を脱ぎ帽を易ふ。土人の来り観る者、車の傍に充満す。去りて知県を訪ね、寓に帰るまで、人の尾して来る者、雲霞の如し。官隸五人、制止し門に入るを許さず。因りて煩雜を免るを得。

- (1) 脱俗のな趣があること。
- (2) 鳥が水を飲み、餌をついばむこと。
- (3) 底本は「村」の下に「家」字が消し忘れて残っている。消去した。

(4) 蛇がとぐるをまいているような様。

(5) いいのがれをすること。

(6) はすのこと。

(7) さんざしのこと。実は食用となる。

(8) あらめのこと。海草の一種。

(9) なまこの腸をとって、煮た後に干したのもの。

(10) 魚のひれのこと。

(11) にんにく、にら、ねぎなどのおいのある野菜のこと。

(12) たまごのこと。

(13) わたいれ、或は下着の類のこと。

(14) 客を引き入れて面会すること。 (有馬)

一月二三日

二十二日。曇。城の内外の古跡を探問す。東観・雲台・鴻都門・上林苑・華林園・耆英堂・西苑・富鄭公園等に至る。嘗て一人の記する者もなし。或ものは既に開墾され、跡を存せずと云ふ。將に馬に跨がりて往きて観んとし、鞍を借る。歩き北するを得ざ

ればなり。里許。北して邙山下に至る。山田高下ありて一ならず。頗る膏沃たり。路傍の壁立すること丈余なり。邙山は西南より東北に至りて長く洛陽を包す。此の辺り、見る所、尋常の岡阜に過ぎず。上に墳墓多し。蓋し唐宋の名賢及び西晋の張華・羊祜等の墓、皆、此に在らんと云ふ。郷導官隸の一として之を知る者なきはいかんともするなし。遂に去る。又た北門より城に入り、西門より出づ。東南のかた十丁許、洛水を渡る。水は広さ一町なるべし。橋を架く。上は梁碑を敷き土を盛りて人を渡す。北岸崩類す。高さ一丈なるべし。其の下は頗る深し。南岸は磧たり。河を渡りて南す。七八丁、悉く沙漠たり。然れども其の中往々にして麦を植う。爰に天津橋あり。石を用ひて壘成す。左右より中間に至り漸く高し。殆ど弓弦の如し。長さ三丈、広さ一丈半なり。此の処、昔は河道たり。水漸く北し、遂に旱地となすなり。橋上に立ちて四望するに、龍門山、南方三四里に在り。高く聳ゆ。西に至りて漸く低し。西南よりして東北に邙山あり。西南隅稍や高く、東北最も高し。東方、漸く広く、山を見ず。洛水は西南より来り東北に向ひて流る。其の北に洛陽あり。風景頗たり。又た南して三四丁。磧尽きて数家あり。村内、榆柳の類多し。爰に邵雍2の安樂窩あり。一堆土あり。長さ四間、広さ二間半、削して方形を成す。側に石柱四本を立つ。三門を開く。中央に題して「宋儒諱康節邵夫子故居」と曰ふ。左右の石柱に題して「鳳皇樓下逍遙客陝鄆城中自在身（鳳皇樓下逍遙の客 陝鄆城中自在の身）」と曰ふ。即ち「擊壤集」の語なり。前に二石碑あり。明人の建つる所を記す。遂に去る。明道・伊川等の墓を観んと欲すれども亦た知

一月二三日

二十三日。天氣朗晴。早起す。西関に抵り程子の廟を拝す。

官隸一人を携へて街中を散歩して行くに、土人の尾して来る者陸續として絶えず。「洋国の賊」と喚ぶ者あり。余之を顧みて且つ行く。乃ち此の言を吐く者なし。一人あり。年十六歳なるべし。

俄に余の傍に出でて笑ひ、且つ人を招き「洋国の賊」と曰ふ。余躍り其の面を打つ。其の人愕然として声を揚げて走り去る。又た一人あり。五十歳なるべし。家中に在りて余を見る。走り出て「洋国の賊」と呼ぶ。余立ちて暗啞す。其の人恐怖して逃る。後に数十人に逢ふ。皆此の如し。蓋し国人、傲語不遜もて俗を成し、而も自らは知らざるならん。睚眦の念あるに非ざるなり。傲言し且つ笑ふ。人の怒ることを見て乃ち恐怖す。亦た奇なり。西門より出でて南行すること四五町。一市の八九町連なるあり。宅地稍や前より高し。煉瓦を用ひて岸を設く。中に階級ありて登降に便なり。旁に榆柳を植う。頗る雅致あり。街に入りて西すること六七町。右に程子兄弟の祠あり。右は則ち范希文³、左は則ち邵堯夫・朱熹⁴の祠なり。祠地の広さ二十于、長さ八十于許。堺するに土壁を以てするも、邵朱二祠は、壁、既に崩壊し、僅かに形跡を存するのみ。程朱二祠は、神位を配享すること極めて多し。范邵の二祠は其の子孫の神位を列するに過ぎず。程祠は別に壁を建て、廡を構へて構を結して范祠を擁す。土人に問ひて曰く「是れ程子の故居なるか」と。曰く「然り」と。一見して去り東関の関門の外に帰る。十時、東関を發し、將に路を汝州に取りて南陽に赴かんとす。洛水を渡りて南稍や東に行く。田圃の間に百家家あり。

る者なし。故道を取り南門より帰る。午後、又た官隸に従ひ銅駝街に到る。銅駝は僅かに半体を存するのみ。街を過ぐ。一廟あり。題して「三靈侯廟」と曰ふ。入りて拝す。文廟に抵る。左門に題して「瀟東寺老子故居」と曰ふ。文廟は、宣聖と伯魚と子思の像を安す。顔・曾以下は唯だ木牌あるのみ。遂に寺に入り、中殿を見る。仏像を安置す。左に老子殿あり。長さ二丈、広さ之に称ふ。中に老子を安す。旁らに一人を立て、前に黒色の棺を置く。風景を殺ぐこと極まれり。乃ち去る。街中を逍遙して帰る。登封より以来、婦女の出でて觀る者甚だ多し。然れども大街に至れば、則ち復た婦女の往来する者なく、家中より覗き見るのみ。

(1) 漢代の宮中の圖書室のこと。

(2) 北宋の学者邵雍(一〇一〇—一〇七七・字は堯夫)のおくり名が康節であることから、「節」の消し忘れか。

(3) 邵康節が、王洪辰に請われて住みかとしたところ。康節は自ら安樂先生と号した。

(4) 邵雍の詩集。二十卷。

(5) 北宋の学者程顥(一〇三二—一〇八五・字は伯淳、おくり名は純公。明道先生とも言う)・程頤(一〇三三—一一〇七・字は正叔、おくり名は正公。伊川先生とも言う)兄弟のこと。二人を併せて二程と呼ぶ。

(6) 孔子の廟のこと。それまで先師廟としていたものを明に改めた。民国に至り、さらに孔子廟と改められた。

(7) 孔子のこと。

(8) 孔子の子の字。名は鯉。

(真銅)

茹家凹寨と曰ふ。更に里許。小紅店を越え、鄭家寨に至る。亦た百余家の村あり。南のかた半里許。一道水あり。広さ四五尺。一橋を架す。傍に石柱あり。題して「古洛莽渠」と曰ふ。洛水より南す。一望平坦たり。地勢漸く高し。此に至りて益ます高きを覚ゆ。更に行く。路、地より低し。広さ一丁に過ぎず。一里強。路の左に一大廟あり。柏樹高く聳ゆ。乃ち閻羽廟なり。一村あり。名は閻廟。休息す。廟に入りて神殿三層を觀る。別に門廡を設く。壯麗なり。次に中嶽あるべし。一拝して去る。太平莊を歴て龍門村に至る。凡そ二里弱。路、地より低きこと丈余。東望するに伊川明滅す。南望するに香山、伊川に峙す。上半腹に寺あり。柏多し。香山の西に伊川を隔てて龍門山あり。其の西に伏牛山あり。皆小木あり。半腹以下は、田塍⁹級級として鱗次す。風景画するが如し。大ひに人意を快くす。龍門村は人家三百なるべし。南端に伊川を臨む。大樹多し。樹下に食店相ひ列す。馬夫入りて休す。余乃ち下車し、磧中より行きて兩山の間に¹⁰出づ。道路は山に傍¹¹ふ。伊川は直して其の下より流る。是れ伊闕たり。大禹の鑿成せし所と云ふ。兩山は巖石峨々として東西に相ひ対す。屏障の如し。岩間、多く洞穴を穿ち、佛像を安す。勝げて數ふべからず。北魏の某后及び則天武氏等の祈願より出づと云ふ。西崖は湧泉多く、甃石之を蓄ふ。昔は温泉ありと云ふ。亭閣、門廡多し。既に去りて、仏殿の前に至る。巖下に三洞あり。洞の口径は各おの三四尺、高さ五六尺。其の中に入るに高さ四五丈。深さ之に¹²稱ふ丈なり。中に大仏を安す。旁に諸仏を列す。中に在りて歩いて語言するに及べば、其の声四面に響きて相ひ応ず。遂に山に沿ひて南して更

に圮橋を渡る。橋身四十間なるべし。水の深さ三四尺。小魚の中に躍るあり。數極めて多し。行きて香山の峯に¹³抵る。凡そ一町半なるべし。一磴を攀りて、香山寺に登る。仏殿四五宇あり。四囲に女牆あり。休すること一霎時。又た行くこと二町許。絶頂に¹⁴抵り低徊す。四望するに、山勢東より來り中断して伊川に枕す。頗る峻峻にして深し。西は龍門山たり。峯頂は香山に比するに稍や低し。北望するに、山は淡烟中に在り。南に數山の四五里外に在るあり。其の間皆平坦たり。伊川、其の中より流れて明滅す。逸¹⁵進して山を下る。河岸に到り車に駕して伊水に沿ひて東す。里許。一小村を過ぎて曹店に¹⁶抵る。百家許あり。屈曲して行く。道路田より低きこと二丈。石礫多し。又た里許。一小流を渡る。高家庄に¹⁷抵る。二百余家あり。其の南の一村の名は彭毫たり。七百余家あり。土壁を周らし石門を設く。河南府を去ること五十里と云ふ。

(1) 怒りのあまり声が出ず、うなること。

(2) 目をいからしてにらむこと。

(3) 宋の名臣范仲淹（九八九—一〇五二・字は希文、おくり名は文正）のこと。

(4) 南宋の学者、朱子（一一三〇—一二〇〇・字は元晦または仲晦。号は晦庵。おくり名は文公）のこと。【四書集註】「易本義」【通鑑綱目】「小学」などの經書の注釈が多くある。

(5) 底本は「祀」の上に「祀」字が消し忘れて残っている。消去した。

(6) 一緒に多くの位牌を合わせ祭ること。

(7) 底本は「擁」字を「推」字に作るが文意により改めた。
(8) 底本は「南」の上に「行」字が消し忘れて残っている。消去した。

(9) 田のあぜのこと。

(10) 底本は「風」字が消し忘れて重複する。消去した。

(11) 底本は「在中」の下に「内」字を残すが、文意により消去した。

(12) 底本は「声」字が消し忘れて重複する。文意により消去した。

(13) 石段のこと。

(14) 短い時間のこと。しばらくの間。

(15) 底本は「嶮峻」の下に「深」字が消し忘れて残っている。文意により消去した。

(16) 斜めに連なること。

十一月二十四日

(斎藤)

二十四日。早く彭毫を發し、南行す。道路、田より低きこと四五尺。往々にして潦水凍合し、石礫多し。凹凸甚だしく、車顛馬倒すること二次。馬足、泥に入り膝を路上に屈す。此れ四望平坦にして、連なること三四里。東西に小山の連なり亘るあり。其の下に人家相ひ望む。樹木扶疎なり。一里強。二小村を過ぐ。未家寨に抵る。東して土壁に傍ひて右転し、田間を取る。一里弱。一百余家あり。文明たり。左折し南す。道路の広さ二丈なるべし。泥濘凝結す。半里許。水寨に至る。三四百家あり。四周土壁す。漸く南山の平地に近し。東南に向ふ。北に平山あり。南山と相ひ

距たること八九町。北山に傍ひて東南のかた一里弱。法集に至る。村落、東西に相ひ望む。此より溝路を取る。半許。一小村を過ぐ。地勢、漸く高し。一小河あり。潺々として東南より流る。地より低きこと丈余に至る。兩岸土崩す。傍に竹林あり。竹の長さ二丈に過ぎず。北省にて竹を見ること極めて少し。竹を見て古人の思に遇することあり。林下に二三店あり。家は其の上に数十家あり。又た石路・溝路等を行き、一里半許。白沙鎮に達す。彭毫より距たること三十里と称す。人家五百余宇あり。午牌、此に休す。南行す。四五町。山に接す。山は高さ一町なるべし。下より上に至る。田塍鱗次し、後に余地なし。左転し右折して十町許。其の頂に出づ。商店二三あり。南望するに、地、平坦なり。間に凹窪せし処あり。人家、多く焉に住す。南行す。三十町。店柯を過ぐ。千余家あり。又た二十町。七八百家あり。大安寨たり。此より以南、地低く且つ平なり。一里弱。一小村を過ぐ。林盧寨に抵る。白沙鎮を去ること四十里と云ふ。市中、頗る繁華せり。瓦屋櫛比し、屋の背、及び四隅に皆獸形を彫す。白沙坡以南、一大山脈の西方三里外に横たはり亘るあり。太安寨に至る。南に一峰の高く聳えて西南の山の後に出づるあり。貫山と曰ふ。山上に祖師廟あり、其の下に奇水寺ありと云ふ。東方、里許。山、東北より來りて断続し南走するものあり。數峯を現はす。最も高きものは、鰲頭山たり。上に塔を建てて玉皇を祭る。彭毫より望みし所の山なり。

(1) 朱書は「未末家寨」に作るが「未」字重複のため一字削除した。

(2) 朱書は「家三四百家」に作るが文意により上「家」字を削除した。

(3) 朱書は「抵為林廬寨」に作るが文意により「為」字を削除した。(有馬)

一月二五日

二十五日。早旦、將に発せんとするに、李葆和、馬夫と店人と争論して止まず。其の故を問ふに、則ち曰く「夜来、寒甚だしく、柴を焼き暖を取る。而して店入、一百余文の過当を得るを要む。故に、其の半を給せんと欲するなり」と。余、乃ち李をして其の請ふに従はしめ、尽く之を給す。門を出でて四五町、店入尾し来り、大声もて相ひ加ふれども、相ひ撲つには至らず。此の邦の風俗、大抵皆然り。文弱の余習と謂ふべきのみ。土人、茶及び湯の水を請ふに、錢を要さざるなし。李葆和等、其の面を洗ふに常に余の余りを請ふ。東南のかた二十町許。五里峪に抵る。二百余家あり。又た半里なるべし。一村を過ぐ。官莊鎮に抵る。土壁中に五百余家あり。又た石路を行くこと五六町。一村を過ぐ。左軛左折して行くこと一里半許。廟營に抵る。人家五百余宇、土壁四周す。商売殷賑たり。林廬寨より此に至るまで、土地、道路より高平たり。凸凹の間を往く。泥濘に患ふ。又た、石多し。二十町許。湾子街に至る。遂に平地となり、頗る広濶たり。村落相ひ望む。東方三四里、山上に裴山寺あり。最も眺望するに宜しと云ふ。廟寨より此に至るまで、童子の多く来りて、頓首して錢を請ふあり。又た東南に向ひて行く。路は広き二丈、車轍・馬跡多からず。半里許。二村の相ひ対するを望む。北は村店街たり。南

は済家庵たり。傍らに小河あり。即ち済河なり。又た三十町許。十里舖を過ぐ。百余家、焉に住す。更に行くこと三十町なるべし。二村を過ぐ。遂に汝州に達す。西関を踰え、南門より入る。壁の周圍十八里許。人家二千余あり。韓碑の所在を問ふに、知る者なし。知州某に見えて之を問ふに、曰く「千里の外にあり」と。天中山を問ふに、曰く「此を隔つること九十里外なり」と。此の夜、知州、余に飲食を贈る。其の肴十余種、飯を盛るに一小樽を用う。粗糲にして牛馬の食に類するものなり。太古の遺風ありと謂ふべし。

(1) 底本は「險遂為平地」とつくるが、文意より「險」字を削除した。(真銅)

一月二六日

二十六日。早起して行く。二十町なるべし。乃ち城門を出づ。門外の人家の路を夾むもの数十宇。漸く東関に至る。百余家あり。昨日以来、道路に塵多し。埃飛揚し此に至る。塵土頗る厚し。車の行き過ぐる毎に黒烟忿起す。南東に行く。亦た石礫多し。一里弱。十里舖に至る。西南の山勢漸く低し。將に山上を断たんとするものの如し。山上に寨あり。又た一塔あり。又た一里弱。二村を過ぐ。路多く平ならず。間に潦水あり。二十里舖に達す。百余家あり。四周土壁あり。壁に從ひて外を過ぐ。道路の荒穢、最も甚し。半里弱。又た二小村を過ぐ。半里弱。又た二小村を過ぐ。壁の左右相ひ望むものあり。柳椿等の樹多し。柳樹或は之を刈り一枝を存せず。蓋し器を作りて用ひるならん。又た田間に桃を植うる者あり。左軛して田間の徑より、本の道に出て行くこと二十

里許。汝安寨に至る。一百五六十家あり。次は趙樓たり。二村の間に小流あり。名は黃家河。又た行くこと一里弱。長安寨に抵る。數百家あり。午牌、此に休す。汝州を去ること四十里と云ふ。此の間、水田に稲を種うる者あり。往々にして根株地を舖く。又た行くこと一里半許。道路の好悪、等しからず。間に小石を見る。潦水の東西の山脈、漸く低し。東南のかた更に一山を出づ。七八里外に在り。又た行くこと里許。路、石多し。七百余家あり。謝店たり。又た行くこと二十町なるべし。泥濘凝結し車轍土に入る。一小村あり。更に行くこと二十田。二百余家あり。二十里舖たり。又た二十町許。二百余家あり。十五里舖たり。道路皆前の如し。更に二十町なるべし。十里を過ぐ。三十町なるべし。郊県の西関に達す。人家數十。路を夾む。余、支那帽を冠し街中を行く。將に扱びて之に宿せんとす。一騎士あり。馬上に在りて余を導きて曰く「東西兩関、兵の駐劄するもの多し。滋事を恐る。宜しく衙門に到り宿すべし」と。余、其の言に従ひて市街より馳せ去る。出でて見る者甚だ多し。蓋し既に衆、余の此れ土人に非ざるを知るならん。進みて衙門に入りて待つに、須臾にして群衆雜沓し行くべからず。官隸叱咤し、極めて衆を排するに力む。老弱困蹙す。亦た余を顧みず席に就く。県令に住の否を問ふ。則ち考試の場に臨みて未だ地に帰らざるなりと。既にして諸種の食出づ。江蘇の人某、此に在りてなす。賓頗る文字を知る。東坡の昼石を出して刻むもの、余に贈る。三蘇²の墳の所在を問ふ。曰く「西北三十里に在り」と。土産を問ふ。曰く「夏は主に麦、冬は主に小米」と。筆談良や久し。復た異聞することなし。此の地、故に郊野地

なり。城囲四十余里。人家四五十あり。街中の石門、累々として相ひ望む。皆婦節を旌はすに係る。其の製、大なる石柱四本を建て、三門を開く。上に大石を架して、屋となす。柱頭の屋の角の諸処に人獸花木を彫造す。屋下の書の聖旨、勅旌の若し。又た某姓名を書す。某氏の坊、石柱の前後亦た甃多し。石、柱と相ひ合す。上に獅子等の像を置く。又た無屋形の上に石柱を横たへ、上に獸形を居し、或は諸物を刻すものあり。此の製、山東以来、府県に多く見るところなり。然れども此の地の尤も多きに如かざるなり。廈屋亦た頗る宏麗なり。市街の兩旁に樹木を列植す。大いに風致あり。夜に至るも知州果たして帰らず。

(1) 官吏が任地にとどまっていること。

(2) 蘇洵(一〇〇九—一〇六六・字は明允、号は老泉、老蘇とも言う)・蘇軾(一〇三六—一一〇一・字は子瞻、号は東坡居士、大蘇とも言う)・蘇轍(一一〇三—一一二二・字は子由、号は穎濱または樂城、小蘇とも言う)の父・兄弟を言う。皆文人として著名であり、唐宋八大家の中に入っている。(齋藤)

一月二七日

二十七日。早旦。刺を知県に投ず。僕人、厚く厚意に謝す。直ちに行く。十町なるべし。東門より出づ。南稍や東して行く。里許。一小村を過ぐ。往々にして路、田より低きこと數尺。泥土凝結す。一百余家あり。十里舖たり。又た里許。二百余家あり。二十里舖たり。路の傍に潦水の停蓄するあり。一石橋を架く。又た里許。双合寨に抵る。道路、前の如し。更に十四五町。汝河の傍に出づ。河は西北より来りて東南に向ひて流る。広さ二十間、

或は十四五間にして等しからず。河の傍の磧は甚だしくは広からず。水の色は潔淨にして飲むべし。往々にして蓄して深碧色を成す。河中、船の四十余石を載すべし。北岸に村あり。西長橋と曰ふ。直ちに汝水に枕す。岸土崩潰す。高さ二丈なるべし。人家、陥せんと欲し甚だ危し。西のかた里許を望むに、山脈、頗る高し。起伏して東南に向ひて走る。意ふに黃柏の諸山にして、長沮・桀溺の耦耕の地も亦た此の際に在らん。更に行くこと五六町。小河を渡る。一村を得。百余家あり。東長橋岩と曰ふ。午牌、此に休す。土産を問ふ。曰く「地瓜・汗烟葉ありと云ふ」と。地瓜とは即ち蕃薯なり。又た一里半強。一小村を過ぎ、二十里鋪に抵る。双合寨より此に至るまで、道路の田より低きこと凡そ二尺。稍や凸凹す。更に二里弱。三小村を過ぐ。道路、前の如し。一処に小流ありて橋を架く。又た行きて襄陽の北に至る。西門より入る。今日、余は支那帽を冠す。故に人の来り觀る者なし。甚だ寂寞たり。此の地の街路、多く石を礎し、車の行く毎に躍り一身に響き頭腦に徹す。最も苦し。南門より出でて坂路を下り右転し、汝水を渡る。水の広さ一町なるべし。中に一丁許を隔てて石を礎す。横に石柱を架け、上に沙土を覆ふ。西北のかた城壁の水に臨むを望む。兩岸の上に人家連綿たり。頗る風致あり。河を渡り左折す。街路を行くこと二三町。一店に至る。宿に投ず。県より距たること六十里と称す。此の日、途中に大車の甚だ多きを見る。或は穀物・麪類を載し、或は石灰・土石等を載す。陸続として往來すること北京より多し。近傍の土地膏沃、物産富饒たるを知るべし。運送は同に牛馬を用ふ。而れども牛尤も多し。亦た人の

推して行くものあり。車製は前狭く後ろ広し。両旁に柄出で、後は頗る長し。麻繩を用いて之を繋ぐ。肩に懸けて両手もて推す。左右の柄もて推して行く。或は二人を用てす。一人は後に在りて之を推し、一人は前に在りて之を輓く。亦た或は驢子を用ひて輓かしめ、後に在りて推して行く。

(1) 底本は「有架潦水架」に作るが、文意より上「架」字を削除した。

(2) 春秋時代の隱者。『論語』微子篇にその名が見える。

(3) さつまいものこと。

(4) 底本は「今日余余」に作るが文意より一「余」字を削除した。

(5) 底本は「称六十里云」に作るが文意より「云」字を削除した。(有馬)

* 岡本の旅程は未だ終了していないが、底本の翻刻・訳註はすべて終了した。本稿もひとまずここで筆をおくこととする。

【訂正】

9号頁数字行数	誤	↓	正
11下5	盤	↓	整
11下15	穴	↓	宋
11上15	背	↓	肯

ありま・たくや(徳島大学・総合科学部・助教授)
しんどう・まさひろ(同志社大学・文学部・助教授)